おこるの当たり前や

みのるさんは、友だちともめ事があると、かーっとなって、ついたたいたり、けったりしてしまいます。だから学校の帰り道もかずみさんやひろこさん、ゆかりさんと同じなのですが、三人が口をそろえて「みのるくん、いやなことしてくるし、いっしょに帰りたくない」と言っていました。先生がみのるさんの気持ちをたしかめると、「もういやなことせん」と約束したので、いっしょに帰るようになりました。その時はみのるさんもうれしそうでした。

六月のある日、朝の会でかずみさんがみのるさんのことを強くひなんしました。

「わたしら、みのるくんがらんぼうせんと、やくそくしたからいっしょに帰っているのに、みのるくん、きのうひろこちゃん泣かしたんや。」

みのるさんがひろこさんのランドセルを引っ張ったので、ひろこさんが後ろに転んで、泣いてしまったというのです。それを聞いた友だちの多くは、「またあいつか。」とあきれた顔をしていました。

朝の会の問みのるさんは、ずっとうつむいたままでした。みんなの「またあいつか」という目が自分に向けられているのを感じ、たまらなくいやな気分でした。

そのとき、先生がかずみさんに聞きました。

「みのるさんは、どうしてあなたじゃなく、ひろこさんにだけそんなことしたんだと思う。」

するとかずみさんは、いっしゅんきょとんとした顔になり、しばらくしてはっとしたように、

「ひろこちゃん、みのるくんのことからかって、おもしろがってにげとった。」

と言いました。すかさずとしきさんが言いました。

「そりゃ、みのるがおこるの当たり前やがいや。」

その言葉で、さっきまでずっと下を向いていたみのるさんが顔を上げ、初めて口を開きました。

「ぼく、いややってん。でも、ひろこちゃん泣いたし、ぼくすぐあやまった。ランドセル引っ張ったけど、手も足も出さなんだよ。」

それを聞いて先生は、

「ようがまんしたな。えらかったぞ。」

と言いながら、みのるさんをだきしめました。

おこるの当たり前や（小学校中学年向け）

A　教材設定の意図

人はいろんな側面を持っている。非常に繊細で人にはやさしい人が、一方ではお金に関してとてもルーズであったりというように。それはあたかも意外な一面を見たようにとられるが、実は「繊細でやさしい」というプラスイメージの言葉が、その人全体を表しているかのように受け取る、つまり聞く側の問題なのである。

これが子どもの世界で「あの子は乱暴な子」というマイナスイメージの言葉であったらどうであろう。学校や地域社会でそうした言葉で語られる子どもは、その言葉のイメージの枠の中ですべての行動が見て取られることに、苦痛を感じているに違いない。それが「決めつけ」である。

決めつけは人を追い込んでいく。決めつけられた子どもにとって、その決めつけから解放されていくことはとても大きな意味があり、人間性の回復につながる。

本教材では、その「決めつけ」を解くきっかけは「おこるの当たり前やがいや」と言ったとしきさんのような子どもの存在であり、そのひとことを導き出した「みのるさんは、どうしてあなたじゃなく、ひろこさんにだけそんなことしたんだと思う」という先生の言葉であったことに注目してほしい。自分だけではどうにもならないところに追い込まれている子どもに対して、支える子どもや先生の存在に気がついてほしい。

B　教材の解説

この教材のもとになったのは、松任市立旭丘小学校での実践である。

「乱暴な子」と決めつけで見られているみのるさんに対し、担任は「おまえの腹立つ気持ちはよーく分かる。でも、蹴ったりたたいたりしたら、おまえの負けや。そして、自分で『しまった』と思ったら、すぐにあやまらんなん」と繰り返し、繰り返し言ってきた。

みのるさん自身も、そうした担任の言葉にこたえようと努力している中でこの帰り道の事件は起こった。「いっしょに帰りたい」「自分なりに努力している」、そうした気持ちを通り越したところで、「またあいつか」という目で見られることのつさのりさんの気持ちになって、その痛みを自分のものとして受け止め、言葉の出ないまさのりさんに代わって、差別の不合理さを訴えたのだ。そうした仲間の存在をお母さんは心から喜ぶとともに、その支えを心強く思う。

私たちは、「障害」を持っている人を「不幸だ」「かわいそうだ」と思いがちである。しかし、まさのりさんとのぞみさんのお母さんは、「障害」を持っている人は決して不幸ではない。ただ「障害」を持っていることで、差別されることがその子にとって生きていくことを辛くさせているということを、事実を示しながら訴えている。

そして、親として一番うれしいこと、心強いことは、親と同じように二人を大切に思ってくれる仲間の存在だと言う。この話は、自分は差別する側の人間になるのか、仲間として差別の痛みを自分のものとして、それを具体的行動として表すのか、仲間としてのありようを問い返してくれる。

C　指導上の留意点

(1)「障害」児のいる学級では、その子とのこれまでの関わりを振り返り、仲間としてのありようを問い返させたい。

(2)「障害」者差別は障害を持つ人の問題ではなく、周りの人間の問題であることをていねいにおさえる。

D　参考資料

・「いろんな子がいるからおもしろい」
　徳田茂編著　（青樹社）所収
「いろんな人たちと出会えて」　橋爪由美子
・挿し絵　松崎厚（金沢市立野田中学校）

E　授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
1　導　入 ①学校の帰り道のことについてたずねる。 ・誰といっしょに帰るか。 ・帰り道にどんなことに出会ったことがおもしろかったか。	①帰り道に起こるいろいろなできごとについて話を出させ、意見の出やすい雰囲気をつくる。
2　展　開 ②教材を読む。	②黙読させたあとに、指名読みを一度する。
③みのるさんはどんな子だろうか。	③「もめごとがあると、かーっとなって、つついたり、蹴ったりしてしまう子」「乱暴な子」というイメージが出されるであろう。板書しながら、それ以外の面はないのかと投げかける。実はみのるさんは友だちと遊びたがっているということを引き出したい。
④朝の会でかずみさんに非難されたとき、みのるさんはどんな気持ちだったでしょう。	④ずっとうつむいたまま、どんな気持ちでいたか考えさせたい。そして、言いたいことがあったけど、言えなかったということをおさえたい。 ・「またあいつか」と見られて、いやな気分だった。 ・ほんとうは自分の方がからかわれたのだと言いたかった。 ・すぐにあやまったし、手も足も出さなかったと言いたかった。
⑤みのるさんが言いたいことがあっても言えなかったのはなぜでしょう。	⑤「またあいつか」という決めつけが言えなくさせていることに気付かせたい。
⑥みのるさんはとしきさんの言葉を聞いてどんな気持ちになったでしょうか。	⑥決めつけで見ない子がいたことで、気持ちが言いやすくなったことをおさえる。
⑦先生が「ようがまんしたな。えらかったぞ」と言ったのはどうしてでしょう。	⑦みのるさんはみのるさんなりに、自分に対する決めつけを拭い払おうと努力していることに対し、先生がほめてくれたのである。決めつけで見られている子のこうした側面は見落とされがちなだけに、しっかりとおさえたい。
3　まとめ ⑧自分たちのクラスにも似たようなことはないか、話し合ってみよう。	⑧「乱暴な子」「困った子」など、マイナスイメージで見られている子の、別な側面が発見できるような話し合いにしたい。そして、そのような子に、自分の気持ちや自分なりに努力していることを話させ、支え合う集団づくりを進めたい。